



神還るわたしは貝になる日和	千田 百里
さざんくわのはらはらと泣きはらすかな	辻 美奈子
安居正浩酢豚定食冬の月	細川 洋子
喝采の心どこかに黄落期	甲州 千草
冬を愛しめと翔先生の忌なりけり	大沢美智子
美田なく美学わづかに一茶の忌	埴 誠一郎
深眠りせむ雪山に連なるべく	岡部 玄治
脱ぎ捨てし私の鑄型古セーター	栗原 公子
大根引き力は要らず腰で引く	能美昌二郎
裸木を冠動脈と思ひけり	町山 公孝
紙漉きの厚さ加減の生成り色	宮内とし子
心てふことばの器一葉忌	矢崎すみ子
金箔の和紙より薄し加賀しぐれ	内山 花葉
雪吊の真帆きら星とピチカート	安藤しおん
かき玉椀とろりと風の三の酉	小林 陽子
草の花牝牛は母となるかたち	栗坪 和子
発心のいろのくれなる冬木の芽	高久 正
落花生のくびれ二人の距離保つ	清水佑実子
葱畑の葱直立をこころざす	井原 美鳥
冬銀河みな沈黙の言葉持ち	鈴木 光影
遠きほど星と触れ合ふ冬木立	小坂 尚子
京人参花のかたちに漆椀	古居 芳恵
寒波来るびんと張りたる水平線	本池美佐子
シヤツに糊利かせ勤労感謝の日	多田ユリ子
冬桜契りし人の遠遠し	石田 静
鴨の声水尾広げつつ重ねつつ	平嶋 共代
何か忘れ何か追はるる年の暮	五十畑悦雄
散紅葉風の画伯の貼り絵めく	澤田 英紀
しろがねの風が風追ふ枯尾花	鳥居 公子
梟にギアある頸の回しやう	加賀 莊介

沖 の 水 脈

